

古代

第4章 貴族政治の展開 2. 国風文化 (1) 国風美術

いちぼくづくり よせぎづくり もくぞうぶつ
一木造と寄木造 —木造仏の作り方—



〈一木造〉木造蔵王権現立像【その4】(三佛寺蔵)★



〈寄木造〉蔵王権現立像【奥之院安置】(三佛寺蔵)★

解説

平安時代中頃、釈迦の死後 2000年が経過すると仏教の効力が無くなり、悟りを得ることができなくなるという末法思想が流行したため、死後、極楽浄土に生まれ(往生)、阿弥陀如来の導きによって悟りを得ようとする浄土教が、貴族をはじめ庶民のあいだにも広まった。

往生することを願う貴族は、阿弥陀如来をはじめとする多くの仏像を仏師に制作させようとしたが、こうした仏像の大量需要に、一本の木から仏像の主要部を彫り出す技法である一木造では対応することは難しかった。その中で生み出され、仏師・定朝によって完成された制作技法が寄木造である。

寄木造は、彫刻をいくつかの部分に分けて分担して彫り、寄せ合わせてつくる技法で、作業の効率化や大型の仏像制作を可能とした。

また、各部材の内側をくり抜くことで、軽量化、乾燥による干割れの減少を図ることができ、さらに玉眼(頭部の内側から目の部分に水晶をはめ込み、本物の眼のようにみせる技法)の使用や、仏像の胎内に経典などを納めることもできるようになった。

図は、三徳山三佛寺(三朝町)所蔵で、投入堂(国宝)の本尊であった2体の木造蔵王権現立像*(いずれも国重要文化財)とその構造をあらわしたものである。左の像は一木造によるもので、一材から彫り出した頭・体・両足に、別材で制作した両腕を接している。年輪年代測定*によって、台座に1025年伐採の木材が用いられていることから、本像は11世紀中頃の制作と考えられる。寄木造の技法で制作された右の像は、内側をくり抜いた複数の材を合わせて整形した頭部・体部に、別材で組み立てた腕部・脚部を接いだものである。胎内には1168(仁安3)年に仏師かうけい(康慶カ)が制作したと読み取れる古文書が納められていた。三佛寺には、この2体以外にも平安時代制作の多くの仏像が祀られており、常時、宝物館で拝観することができる。

*蔵王権現 修験道の本尊。役行者が金峯山(奈良県)で修行中に現れたと伝えられる日本独自の神格で、釈迦如来・千手観音・弥勒菩薩の合体したものとされる。

*年輪年代測定 年輪の幅が生育環境に依存することを利用し、その変動パターンを比較することで年代を決定する方法。

〈一木造と寄木造の特徴〉

	制作技法	分業	重量	大型仏の制作	耐久性
一木造	1本の木材から主要部を彫り出す。 (腕・足など、体の一部を別材で継ぎ足す場合あり)	難	重い	材木の太さ・長さに制約される	ひび割れしやすい (防止のため、背中をくり抜く場合あり)
寄木造	各部分を複数の木材で別々に分担して彫り、寄せ合わせる。	可能	軽い	可能	ひび割れしにくい (内側をくり抜くため)

(担当：石田敏紀)

参考資料

- 鳥取県立博物館 『鳥取県の仏像調査報告書』(2004年)
- 鳥取県立博物館 『鳥取県の自然と歴史4 三徳山とその周辺(改訂版)』(2005年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。